

中学社会科教科書の研究 (第二報告)

—地理的分野の教科書に関して—

中尾正三・石黒 彰二
織田長繁・都築 享

1. ま え が き

我々がとりあげた社会科教科書(地理的分野)の分析については、その目的、方法及び分析の結果の全体的な概略は、本校研究紀要第1集に発表した(第一報告)にのべてある。こゝに発表するものはその続きであり、教科書の具体的内容の検討の結果である。

2. 内容分析の方法とその基準

前掲論稿においてのべたように、我々は中国、イギリス、ソビエト連邦、アフリカ、アメリカ合衆国、ラテン・アメリカの各地域についての記述を、特に国際理解という観点から検討して、そこにいくつかのタイプを見出そうとした。前もって一定の基準を設定して、そこにあれが書いてあるこれが書いてないなどとみてゆく行き方もあるし、どちらがよいか、これは非常に微妙な問題であると思われる。がしかし、我々としては、そういうことの前に、まずこの教科書は何をねらって編集されているか、その意図はどの程度達成されているであろうか、そしてその編集のしかたは、現場で使うさいの教師に、また生徒の学習に際してどういうぐあいであろうか、というようなことをみようと考えたのである。そのために、我々は教科書を、自然、生産、地域の性格、社会的・歴史的背景、日本や世界の他地域との関係、基礎的知識(とよつうよばれているもの、例えば山や川都市名など……)、及び全体の構成・叙述・学習の為の配慮、などがどういう風に、どの程度とりあげられ、書き記されているかを分析し、そこに

いくつかのタイプを見出そうと試みた。

3. 教科書のいくつかのタイプ

そのようにして我々が見出したいくつかのタイプについてのべてみよう。8種の教科書は、それぞれ独自の特徴をもっているが(それは後でふれる)大まかにみて次の4種のタイプに分けられる。

- A. いわゆる戦前風の地誌的傾向の強いもの……3
- B. いわゆる戦後社会科の単元ふうの、高校の人文地理的傾向の、機能別のも……2
- C. 地誌的叙述であるが、その内容には新しいものをくみいれようと努力しているもの……2
- D. 地誌的叙述もし、且つ機能別単元でのまとめもしようとしているもの……1

更にその細部にわたって検討してみると前でもいったようにそれぞれ特徴をもっているのので、そのおのおのをかりに、A1, A2, A3, B1, B2, C1, C2, Dとなづけて、その細部について一つ一つ検討してゆこう。

4. それぞれの教科書

A1。

もっとも地誌的傾向の強いものである。最初に位置、面積、人口をのべ、次に人文現象をのべ終りに自然条件があげてある。いわゆる基礎知識(であるかどうかこそ問題としても、とにかくこゝではそれにはふれない)も、タンピゴ、ベレムカラカスなどの都市名から、ギリマンジャロの山

が6010mであることまであげられている。自然条件について、又生産物の種類などについても、くわしくのべられている。地域の特徴についてはあるていど説明を加えているが、表面的、羅列的でそれを支えている社会的条件については殆んどふれられていない。例えば、イギリスの工業地帯について、現在、さかんであること、都市名、産業名などはくわしくのべられているが、産業革命以来の歴史的発展や、現在イギリスが直面している諸問題については全くのべられていない。

この教科書でとくに目についたことは、中国のところで昔の日本の利権にくりかえしふれ、日本人によって開発された中国ということがのべられていること、又アフリカが近ごろ開発されたことを「ヨーロッパがアフリカに疎開し始めた」ということばで説明していることである。

しかし他面、この教科書は学習の為の配慮、資料などではもっともすぐれた編集がされているものの一つである。資料はよくまとめられ、効果的であり、さし絵も多い。又適切な問題を出して本文の平板化をふせぐとか、欄外に術語・難語の説明をつけるとか、気候図・地形図がわかりやすく且つ鮮明に印刷されているとか、主な国々の叙述のかたわらには面積・人口をそれぞれ日本と比較図化したものをかゝげているとか、くわしいさく引がつけられているとか、みるべきものが多い。なお叙述はたて書きである。

A 2.

これもやはり旧来の地誌風であり、固有名詞も例えばチチカカ湖の名が出、山の名と同時にその高さまでが本文に出てくるふうで、都市名としては中国の長安・洛陽などまで出ている。しかしA1と違ってとくに都市を独立してとりあげることなく、産業と結びついて出され、頭註で細かな説明がなされている。又従来の断片的平面的羅列を何とかのりこえようと努力しているようにもみうけられ、自然的条件もくわしくふれ、自然と人間生活との関係を出そうとしている。しかし生産=産業=生活というふうに考えているようにみられ、社会的経済的な面や、歴史的背景にまではふれてはおらず、又現代の諸問題にもおよんではない。

ない。たゞ現状をのべるのみで、将来への見とおしといったものを感じさせる要素に乏しい。

しかし学習の為の配慮はよくなされ、学習したことの整理として「おもなことば、おもな地名、おもな産物」の項が設けられ、註や見出しが有効に利用されている。グラフも理解しやすく整理工夫され、写真にも説明がつけられている。又参考書索引がつけられている。しかし学習問題はあまり適切とは思われない。なおA1と同じくたて書きである。

A 3.

自然・歴史・産業・生活が量としてはかなりとりあげられ、形式としては新しい地誌をうちだそうとしているようにみえるが、並列的でそれら相互の間の関係をつかませるに十分であるとは思われない。自然と生産の関係はかなりのべているが、生産の社会的・経済的関連にふれられていないし、現代的問題には殆んどふれられていず、あっても抽象的な説明のしかたである。たゞ人間の努力とか、国民の協力とか、国民性とか、道徳教育的要素が強く出されているのは注目すべき特徴である。又アメリカ合衆国とソビエト連邦とがかなり大きな比重をもって扱われているが、それらの社会関係にはふれていない。又イギリスについては「かつては世界の中心であったが、今は米ソに勢力をうばわれている」といった表現を用いている。又現在の世界が西洋中心であることをのべ本国と植民地の関係についてふれ、ソ連圏とアメリカ圏の対立のことにもふれているなど、めにつく特徴であるが、一方南アメリカにアメリカ資本が多く支配的であることなどにはふれてはいない。そして又叙述の仕方が道徳的・教訓的な感じがすること、写真がきれいではあるが風景写真が圧倒的に多いことなどもめにつく特徴である。さく引は普通のさく引の他に図版のさく引もついている。学習の為の問題は作業を中心としてはいるがあまり適切で有効であるとは思われない。なお又これもたて書きである。

B 1.

地誌的なまとめではなく、自然・国々・資源と産業・交通と貿易、といったまとめかたをして

いる。資源と産業交通と貿易のところにおいても国別にとりあげている。国々のところにおいても資源と産業、交通と貿易のところにおいても、たゞ何があるという事象の平面的な簡単な羅列がなされている。歴史的・政治的背景についても、又現在の問題についても殆んどふれられていない。学習資料としての統計地図は不十分である。しかし「学習に入る前に」「学習のめあて」という項目を設けてあるのは一つの工夫であり、親切な配慮というべきであろう。

B₂.

この教科書は徹底的に高校風の人文地理的取扱いをとろうとしている。国々の地域についての地誌的取扱いは「国々を旅行しよう」という形でイギリスは半頁、ソ連は写真一頁、本文一頁の程度にふれ、自然・生産・生活などについては相当深くつっこんでいる。国々について47頁さいているのに、自然・生産については81頁もさいていることから分ろう。そしてしかも、その少ない国々の叙述の中で一応要点は簡単にまとめられ、自然・生産ともに人間生活との関係に意を払っている。特に生産はその歴史的発展をたどりながら記述され、又現実の問題のとりあげ方にも創意がみられる。しかしこの教科書で問題と考えられるものも幾つかある。人文地理風の編成を貫く為に、生産関係や歴史を人種のところでふれ、(例、産業革命をチェートン人種で、ラテン・アメリカの歴史をヨーロッパ人種のところでふれている。)又、統計資料が世界全体の産業別についてのみかゝげられ、地域・国別のものがないことなど、その著しい点である。それらを補う為に全体のまとめとして、国々と世界全体を総括するような学習活動でも示されていたらと思った。

C₁.

これは地誌的取扱いを正面におしだした教科書である。しかしAのタイプとはちがい、生産と生活を中心に歴史的・政治的背景や現代の問題を社会科学的面からとりあげて、その地域の特色をつかませようとしている。例えばイギリスにおいては産業革命以来の歴史と戦後イギリスの当面している問題が、又アフリカやラテン・アメリカに

おける帝国主義的支配を、大きな比重をもってとりあげている。しかしあまりにも多くの、重要な問題を圧縮しようとしてか、数量的表現や社会科学用語(例えば、独占企業、半植民地、零細経営など、)がひんぱんに使われ、文章が簡略化されていることは、中学1年を対象としては消化しきれない恐れもないではないと思われる。

C₂.

これもC₁と同じく新しい視点から地域の特徴をはっきりうちだそうと努力している教科書である。そしてC₁とちがい、数量的統計はわかりやすい略図や図表として視覚化し、文章も親しみやすくやわらかい叙述でまとめられている。写真は生産の写真が多く、説明が適切につけられ、研究問題も数は少ないが、本文を補うような問題がかゝげられている。(例、「コルホーズの林ごの取りいれ」と題した写真をかゝげ、その説明にウクライナのドンバス地方は石炭と重工業で知られているが、附近の農場では毎年豊かな穀物や果物が実っている」とつけられている。)しかし、社会的・歴史的条件が強調され、スペースがさかかっているのに反し、自然条件のえがき方が不足し、その自然を克服してゆく人間の努力や社会的条件の印象がかえって弱いような感じもする。又印象的に、強い感銘を与えようとしてゝあろうが、説明ぬき、資料ぬきで、断定し、その結論を見出しでパツとだしてあるといったゆき方も一考を要するのではなからうか。

D.

この教科書はBのタイプにみられる人文地理風のまとめについても、又各地域についての地誌風取扱いについても、両方ともくわしく、他の教科書が日本・世界・各一冊づゝなのに対して、日本に一冊、世界の国々についての地誌風扱いに一冊、世界のまとめについて一冊、上中下の三冊をあてゝいる。その叙述の特徴は日本を中心としてまとめようとしていることで、中巻「世界の国々」においては、「日本のまわりの国々」という題から出発し、下巻の世界中の生産・交通・貿易のまとめにおいても、たえず日本と世界の国々との関連比較のもとに叙述が進められている。又生産

及び生活を自然条件との関係のもとにくわしく具体的に説明している。しかし社会的条件についてはあまりふれられていない。たとえばソ連のところでコルホーズがあること、その組織形態についてはかなりのべてあるが、ソビエト革命とそれのもたらした基本的な社会機構についてはふれられていない。又イギリスについてはその歴史にはふれてあるが、現在の問題はとりあげていない。

その他この教科書の特徴としてあげられるものとして、学習の為の配慮がよくなされていることであろう。図表、統計がくわしく出され、普通の本文さく引の他に、写真・さし絵・地図のさく引がつけられているし、「復習と研究」の問題が、各地域としても全体としてもよくまとめさせるようなものが出されている。又見出しも工夫され「起ち上る東ヨーロッパ」"ヨーロッパの植民地アフリカ" "銀の高原メキシコ" "家畜は元気ですか(蒙古)" などよく特徴をあらわし、且つ又注目をひくようなことばが使われている。しかしその本文が必ずしも見出しから予想されるとおりでなく、平凡なものとなってしまっていることも少なくない。

5. おわりに

以上教科書についていろいろなタイプを考察して来たが、次に教室で実際に生徒と共に学習する場合に望ましいと考えられるいくつかの問題を考えてみたい。

"どういふ教科書がもっともいふのか"

この問題は結局我々を、一体地理学習は何の為に行うのか、というところまでもう一ぺんたちかえらせることになる。これは学習指導要領が我々

に教示していることであるが、我々としてごく素朴に考えることは、とにかくこの現実の世界の中で、生れ、働き、生活している人間のこと；国々のことを、はっきりとありのままに知り、そして今あるいろいろな問題を解決してゆく為に役に立ってくれるような勉強でありたいということである。そのいみから、昔風のどこに山があり、川があり、都市の人口は、というような地誌の切り売り、平板な暗記ものは困ると思う。しかし戦後、一時風びした、たゞ世界中の農業や工業やその他について；無関係にバラバラに勉強する、国籍も現実的なにおいも、何も無い、結局どこのものでもないような抽象的なものでも困ると思う。結局それも生徒にとっては単なるアチーブ式テストの為の課業か、百科辞典の丸うつし、棒読み発表にすぎないものになってしまうだけである。結局、現実の問題をよくとらえ、それに自然的・歴史的・科学的究明を加え、生々とした人間の生活が躍如として感じとれるような、それぞれの国々についての新しい地誌的なまとめこそが現在望ましいものではないかと思う。しかし、それはもち論生徒の興味や発達段階を無視したものではなく、あくまでも中学一年の生徒が学習するということを見失わず、学習の為の配慮、(さし絵や視覚化された資料のかゝげ方、問題の提出のしかた、又文章やことばづかいなど)を十分にこらし、又一年間でやりおえるに十分な分量をも考えたものであり、教師や生徒がそれを使うのに十分に活用できるように工夫されたものであってほしいと思う。そうした点から、本論(その3)で加えた各教科書への検討が、何らかの役に立てば望外の幸福である。